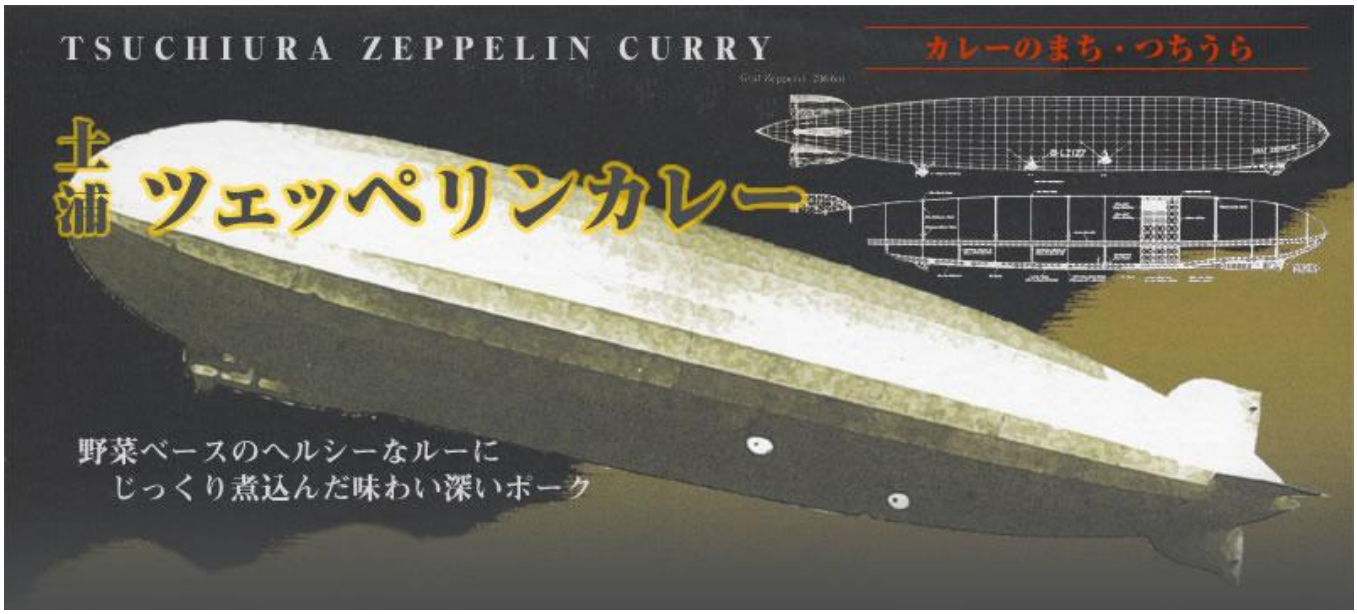
土浦ツェッペリンカレー　カレーのまち・つちうら



1929年（昭和4年）ドイツの大型飛行船ツェッペリン伯号が、人類初の飛行船による世界一周を成し遂げました。この巨大飛行船は、ドイツのフリードリッヒスハーフェン市で建造された当時の最新技術の結晶で、全長２３６m、乗員65人、時速１００kmでの飛行が可能でした。

このツェッペリン伯号が、世界一周の途中、初めて降り立ったのが当時の霞ヶ浦海軍航空隊（現在の霞ヶ浦駐屯地の一角）でした。土浦市史によれば「外国機が陸続（りくぞく）として飛来し、霞ヶ浦は世界的空港とうたわれるようになったが、昭和4年（1929年）8月19日には、世界一周のドイツの大飛行船ツェッペリン伯号が、阿見原に着陸した。このときは上野、土浦間に臨時列車が上下5本も運転され、その観衆30万、土浦、阿見間のいわゆる海軍道路は人で埋まった。」と当時の様子が記されています。この出来事は翌日の全国の新聞紙面を飾り、「君はツェッペリンを見たか！」が当時の合言葉になりました。

霞ヶ浦が飛行船の寄港地に選ばれたのは、第一次大戦で日本が戦利品としてドイツから持ってきた巨大な飛行船の格納庫があったこと（東京駅が２つ入ってしまう大きさで、広さ約600畳の扉が2枚ついていた）。湖畔で風などの気象環境がよいこと。首都東京に近いことなどの理由があげられています。

この歴史的背景により、土浦市とフリードリッヒスハーフェン市は、その後、友好都市として結ばれ、様々な国際交流が進められています。

土浦では、当時飛来したツェッペリン伯号の乗組員たちに、地元右籾(みぎもみ）産のジャガイモを入れたカレーを振る舞って歓迎した話が残っています。「土浦ツェッペリンカレー」は、このツェッペリン伯号ゆかりのカレーを土浦商工会議所女性会が現代風にアレンジして再現したもので、飛行船型のターメリックライスにジャガイモをメインとした野菜ベースのヘルシーなルーと特製のたれで、じっくり煮込んだポークが絶品です。更に付け合せには、日本一の生産量を誇るレンコンをはじめジャガイモ、ニンジン、オクラなどの野菜がトッピングされています。

今、土浦では、「カレーのまち土浦」を目指して、「カレーによるまちづくり」に取り組んでおります。

まちかど蔵　大徳、きらら館、小町の里で販売

土浦商工会議所女性会がつくった「土浦ツェッペリンカレー」です。

喫茶　蔵（まちかど蔵　野村）
※土日限定３０食

飛行船のパイオニア
ツエッペリン伯爵とエッケナー博士

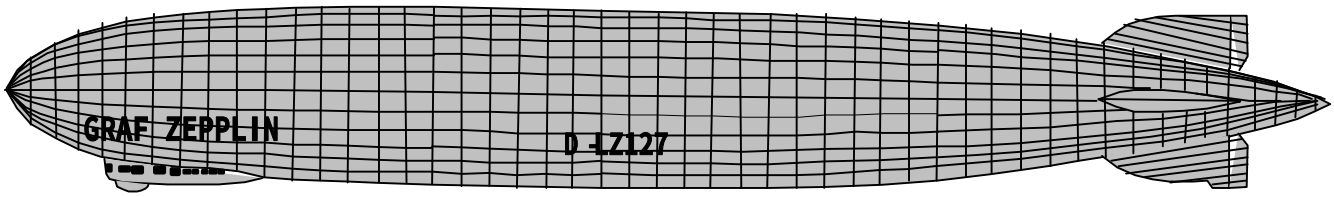
グラーフ・ツェッペリン伯爵（写真左）は1838年に生まれています。彼は軍人として南北戦争の視察の際に、気球を体験しました。この後、1890年に退官したのち、ホーデン湖に会社を設立し、飛行船の製作にとりかかりました。伯爵は技術者ではなく、設計図を自ら引くことはできませんでしたが、周辺に優秀な人材を配置し、一大事業に取りかかりました。

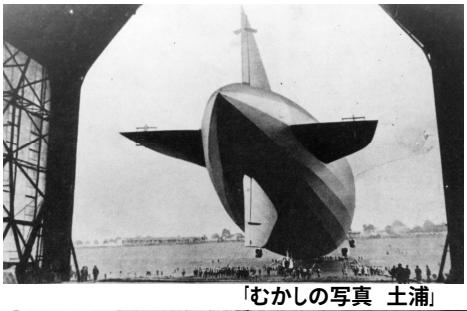
伯爵の死後、伯爵のよき理解者であったフーゴ・エッケナー博士（写真右）が伯爵の後継者として飛行船事業に携わりました。ツェッペリン伯号（LZ127）においても、彼は船長として世界一周の冒険飛行の指揮をとりました。

ＬＺ１２７の主な概要

■1928年9月18日完成
全長 236.6m
直径 30.5m
ガス容量105,000m3
積載量30ｔ

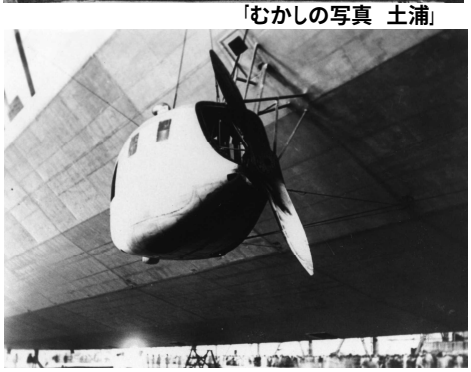
マインバッハ550馬力エンジン５基搭載
最大速度　128km/ｈ
航続距離　12,000km
乗客20人
乗員45～50人




「むかしの写真　土浦」

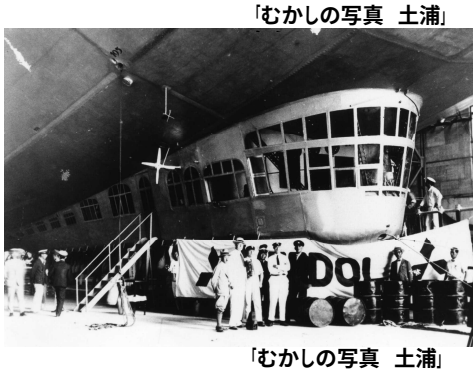
尾　翼

直径約30mもある大きな尾翼が４枚ついて、これで巨大な船体を自由に操る。霞ヶ浦飛行場の巨大格納庫にも入りきらず、この尾翼部分が出ていたということです。


「むかしの写真　土浦」

エンジン

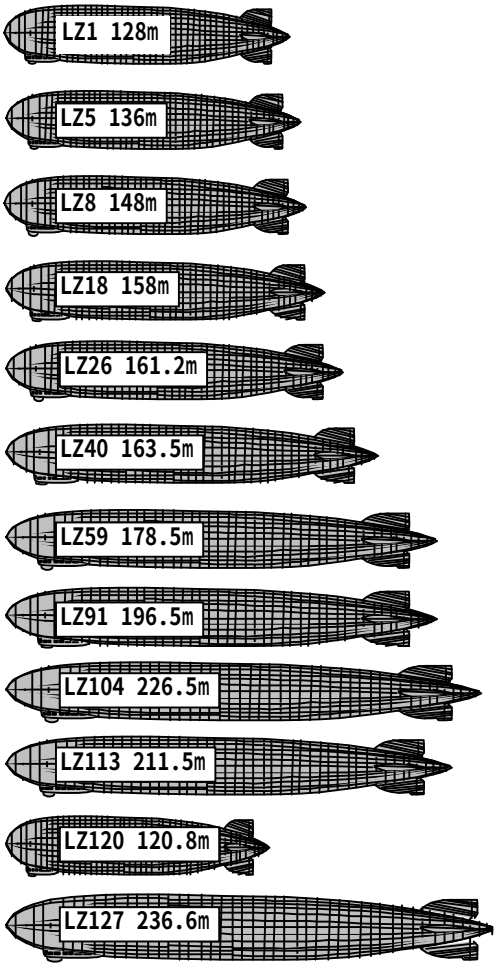
マインバッハＶ2水冷式12気筒エンジンが5基つけられていました。1基で550馬力をたたき出すといわれています。


「むかしの写真　土浦」

ゴンドラ

ツェッペリン伯号のゴンドラは、操縦室と司令室キャビンを兼ねていた。豪華なサロンでは、毎夜大空の上でワイングラスが傾けられていたそうです。

■主なツェペリン飛行船■



未知なる大空へ・・・
ツエッペリンに乗った日本人

ツェッペリンの乗客には主に新聞記者や、学者、富豪などがいましたが、６人の日本人も乗船しました。

土浦市出身の藤吉直四郎海軍少佐の乗船の見送りには、夫人や子どもたちが、涙を流してその栄誉を喜んだといいます。また、北野吉内東京朝日新聞記者と円地興四松大阪毎日新聞記者は報道競争を繰り広げたといいます。

そのほか草鹿龍之介海軍少佐、柴田信一陸軍少佐、白井同風日本電報通信社記者が乗船しました。

７０年前、いまだ航空機が特殊な乗り物であった時代に大空を翔けた人々は、一体どのような感慨を持ったのでしょうか。

世界一周の中継基地
霞ヶ浦を訪問した航空機

大正から昭和初期にかけては、飛行機時代の幕開けとして多くの冒険飛行が行われ、霞ヶ浦は水辺の立地条件が適していたことから、世界一周などの中継点などで多くの航空機が訪れました。

大正１３年（1924）アメリカの世界一周ダグラス・ワールドクルーザー３機の飛来にはじまり、イギリスのマクラレン少佐のバルチュア水陸両用機、アルゼンチンのザンニー中佐のフォッカー機、１４年にはイタリアのデ・ビネード中佐のサボイア飛行艇、昭和２年のアメリカ人飛行家シュリーとブロック、５年には太平洋横断に挑んだタコマ市号、６年には夫人を伴って大西洋横断飛行で話題を呼んだリンドバーグ夫妻がロッキードシリウス号で、７年のドイツのフォン・グロナウ中佐等４人のドルニエ。ヴァル飛行艇まで多くの有名な飛行機の訪問が続きました。